福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

福井県三国町旧市街地の町家と町並みに関する調査研究―上新町の景観の概要―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 勝也, 中村, 環, 岩瀬, 純平, 高井, 翼, FUJITA, Masaya, NAKAMURA, Tamaki, IWASE, Junpei, TAKAI, Tubasa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/2534

福井大学地域環境研究教育センター研究紀要
「日本海地域の自然と環境」
No.10，67-74，2003

福井県三国町旧市街地の町家と町並みに関する調査研究
――上新町の景観の概要――

A Case Study on the Town Houses and Townscape of the Historical Urban Areas in Mikuni Town
—During the townscape of Uwashin-machi—

藤田　勝也*
（福井大学工学部建築建設工学科）
中村　　環**
（くみあい建設）
岩瀬　純平***
（福井大学大学院工学研究科）
高井　　翼***
（福井大学大学院工学研究科）

1　はじめに

本研究の目的は、2002年9～10月に著者等が行った福井県三国町旧市街地の町並み景観調査[1)]によって明らかになった、町並み景観の現状に関する調査結果の概要の報告と分析にある。調査範囲は三国町旧市街地の、おもに滝谷・下町・上新町の３地域であり（図 1）[2)]、本稿ではとくに上新町を中心に考察を加える[3)]。具体的には上新町の地域性の抽出ならびに，1980年に行われた調査（以下「1980年調査」と略称する）[4)]との比較にもとづく、ここ約 20年間における町並み変容の実態解明である。これをもって、今後の町並み整備の基礎資料の一端として役立てたい。なお今回の調査ではあわせて伝統的な町家について正面意匠に関する詳細な調査も行っているが、調査結果ならびに、その分析と検討の内容については別稿に譲る。

図１　三国町旧市街地図

（キーワード：景観、三国町、上新町、町家、町並み、旧市街地）

*　Masaya FUJITA,Department of Architecture and Civil Engineering,Fukui University
**　Tamaki NAKAMURA, Kumiai Kensetsu co.,ltd
*** Junpei IWASE,Graduate School of Engineering,Fukui University
*** Tubasa TAKAI,Graduate School of Engineering,Fukui University

2　三国湊と上新町[5)]

三国湊は、福井平野を日本海に向けほぼ北流する九頭竜川が竹田川と合流する河口近くの右岸に位置する。三国湊は古くから荘園米などの積出港として栄え、とくに中世南北朝期以降は湊の経済的・軍事的役割をめぐって複数の勢力が交錯したという。現在の三国町域は江戸時代、福井藩・丸岡藩・天領に三分されていた。三国湊はこのうち福井藩の支配下にあって、九頭竜川流域一帯と上方とを結ぶ物質の集散地、全国規模の流通の拠点として保護をうけ大きく発展する。とりわけ17世紀後半、西回り航路の開発によって三国湊は日本海側における有数の寄港地の一つとなり、幕末～明治初頭に最盛期を迎える。明治後半、旧国鉄北陸線の開通は、湊の役割を急速に低下させる大きな要因の一つとなるが、現在なお残る伝統的町並みの一郭に往時の繁栄をしのぶことができる。

旧市街地のうち、下町が九頭竜川（川上側は竹田川）に平行する下町通り沿いに、中世以来の由緒をもって発展したのに対し、上新町はその後背台地上、下町通りにほぼ平行して走る上ハ町通り沿いに展開する（図１）。上新町は万治２年（1659）、標高約６メートルの台地上に、下町とは別に開発された新市街地であって、寺社を取り込みつつ整然とした町割りを形成する。回船問屋、材木商など大商人が屋敷・蔵を構える川沿いの下町に対し、上新町は日常生活用品を扱う小売商人、湊の日常生活を支える大工、桶、指物職人など、商工業者の居住区であった。また当時の町場の最外縁部に位置する、現在のえちぜん鉄道三国駅前、氷川神社周辺は、遊女屋、芝居小屋が集まる遊興の地として機能した。

江戸時代の三国湊は、度々火災に見舞われる。上新町では文政６年(1823)、400棟近くが焼失するという大火があって、町はほぼ全焼に近い状況と推察されている。その後個々の建替え・改築も少なくないとはいえ、全体に調和のとれた景観が今なお上新町にみられるのは、この大火を契機とする再建・整備によるところが大きい。

『三国鑑』（元治元年〈1864〉成立）[6)]によれば、下町と同様上新町もまた、表町と裏町からなっていた。上新町では前者は７町、後者は４町という。表町は平野町、久宝持町、上薬師町、下薬師町、清円寺町、喜円町、平野口町の都合７町、裏町４町の具体名は不明だが、ここでは沢出町、今出町、唯称寺垣内、勝授寺門町に推定した(図２)。

図２　上新町の町割

3　調査結果からみた上新町の特徴

旧市街地にたつ建物計 2,935 棟の地域別内訳は、表１の通りである。以下では上新町の 615 棟を中心に検討を加える。

表１　各地域の建物総棟数

地域名	上新町	下町	滝谷	その他	計
棟数	615	1150	680	490	2.935

3.1　旧市街地全体からみた上新町の特徴

ここでは旧市街地全体からみた上新町の特徴について概観する。

3.1.1　建物全体に関して

まず建物形態（図３）では、町家型住宅の占める割合は 10 パーセント程度で下町とほぼ等しい。屋根形状（図４）では上新町に前下屋の町家は１棟も残らず、陸屋根の割合が他地域より高い。建築年代（図５）ではどの地域も戦後の建物が過半を占めるが、上新町では 1980 年以降の近年の建築は他地域に比べて若干少ない傾向にある。

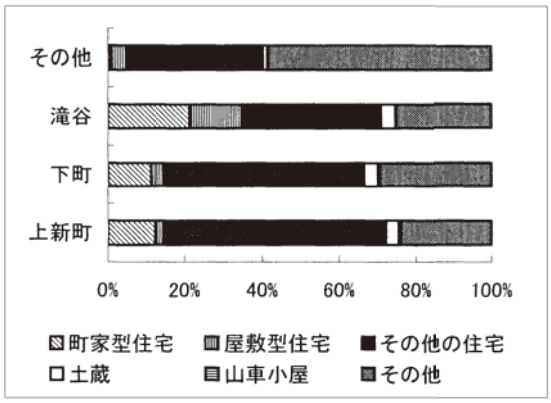

図３　建物形態（%）

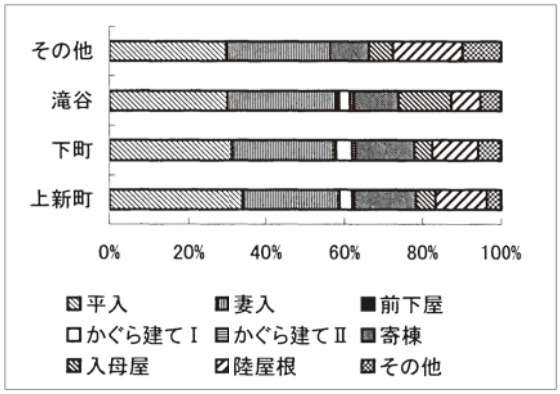

図４　屋根形状（%）

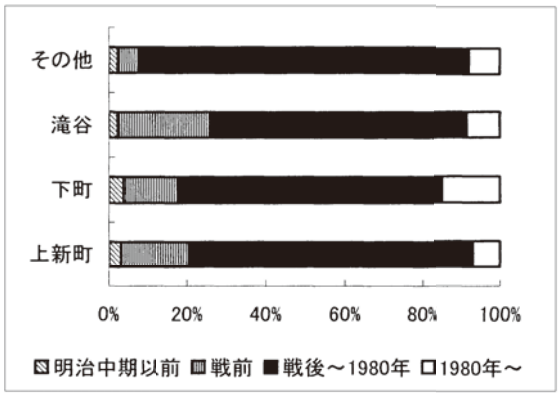

図５　建築年代（%）

3.1.2　町家型住宅に関して

旧市街地にたつ町家型住宅は計 329 棟であり、その地域別内訳は表２の通りである。上新町は下町、滝谷に比べ棟数は少ないが、前記した通りその割合は下町とほぼ同じである。

表２　各地域の町家型住宅の総棟数

地域名	上新町	下町	滝谷	その他	計
棟数	72	120	133	4	329

上新町の町家型住宅は、つし二階の割合が高く（図６）、また屋根形状（図７）では平入の割合が高く、かぐら建て（前下屋・かぐら建てⅠ・かぐら建てⅡ）[7] の割合は下町に次ぐ。屋根材質は本屋（図８）ではどの地域も越前瓦が圧倒的だが、上新町では鉄板の割合が他地域に比べ高い傾向にある。小屋根は和瓦が高率、銅板が低率である（図９）。建物用途（図 10）では戸建て住宅、店舗併用戸建て住宅が大勢を占める中で、上新町は戸建て住宅の割合がもっとも高い傾向にある。これは小売り商業

地域という上新町の地域性の希薄化を示唆するものか。しかし建築年代（図 11）をみると、どの地域も戦前の建築が大きな割合を占める中でも、上新町はもっとも高率であることから、用途はたとえ変わっても、伝統的な町家は今なお健在のようである。

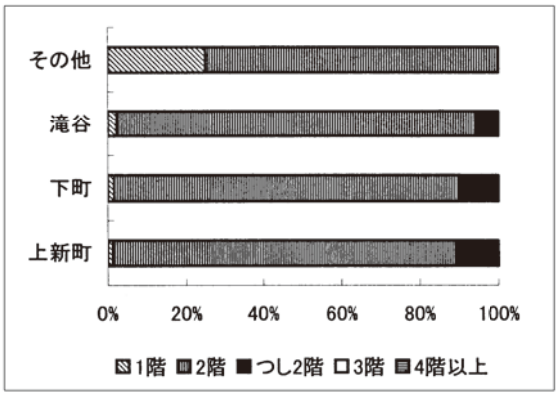

図６　階数（%）

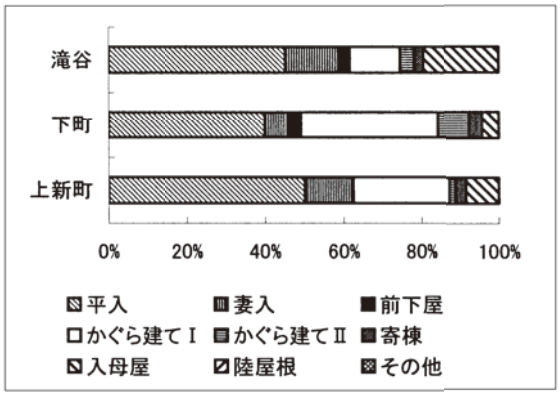

図７　屋根形状（%）

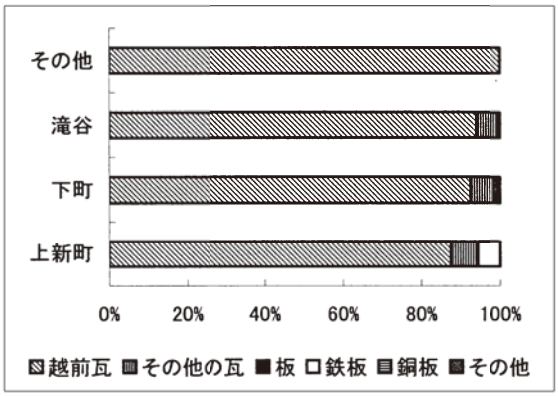

図８　屋根材質(本屋)（%）

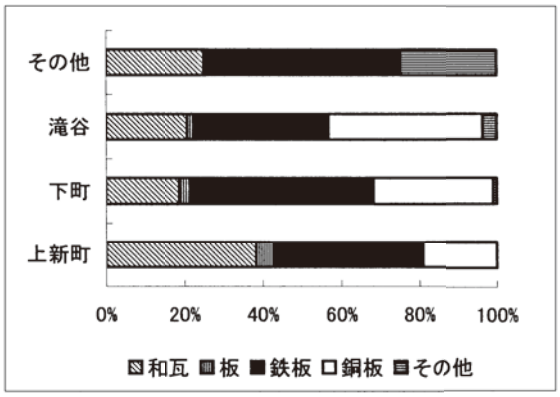

図９　屋根材質（小屋根）（%）

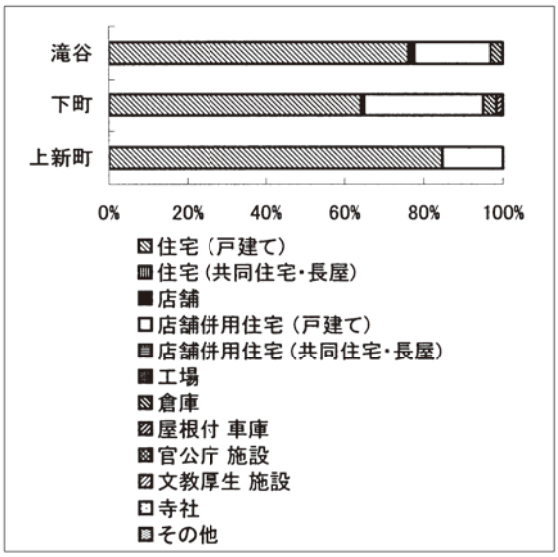

図 10　建物用途（%）

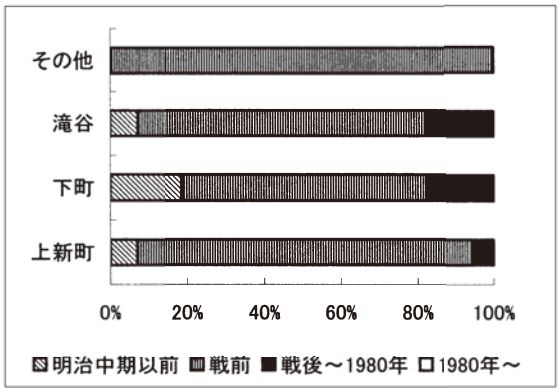

図 11　建築年代（%）

3.2　上新町内における各町の特徴

ここでは上新町内における各町の特徴について概観する。

3.2.1　建物全体に関して

建物形態（図 12）では、どの町も「その他の住宅」がもっとも多い。町家型住宅の割合は表町でほ

ぼ均一だが、土蔵の棟数は喜宝町が多い（図 13）。建物用途（図 14）では各町とも戸建て住宅の割合が高い。店舗（併用住宅を含む）の割合が平野町、喜宝町に多いのは駅前通り商店街を含むことにもよるのだろうが、久宝持町がもっとも高いところから、商業地域という上ハ町通り沿いの地域性は継承されていることがわかる。どの町も戦後の建物が多い中で（図 15）、清円町、平野町、喜宝町、上薬師町では戦前の建物の割合が比較的高い。いっぽう今出町には戦前に遡る建物は確認できない。

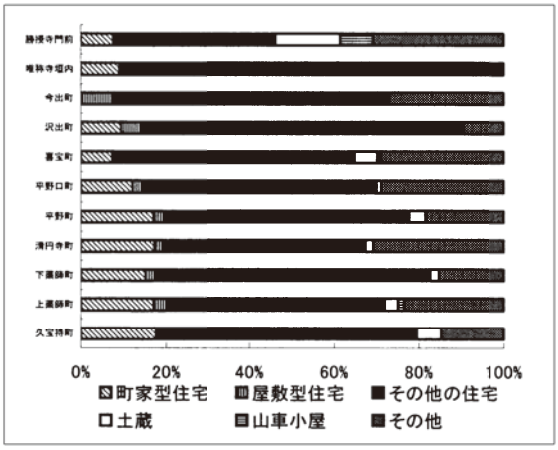

図 12　建物形態（%）

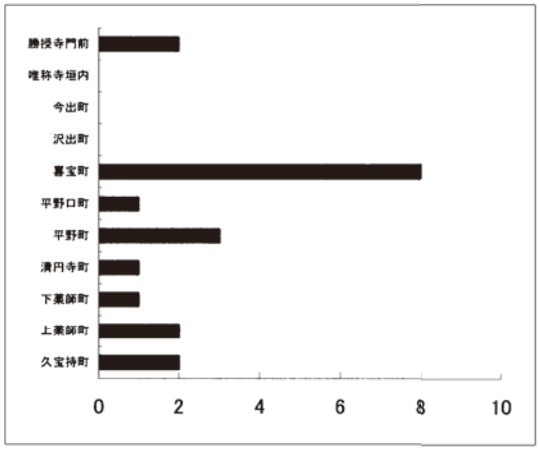

図 13　土蔵（棟数）

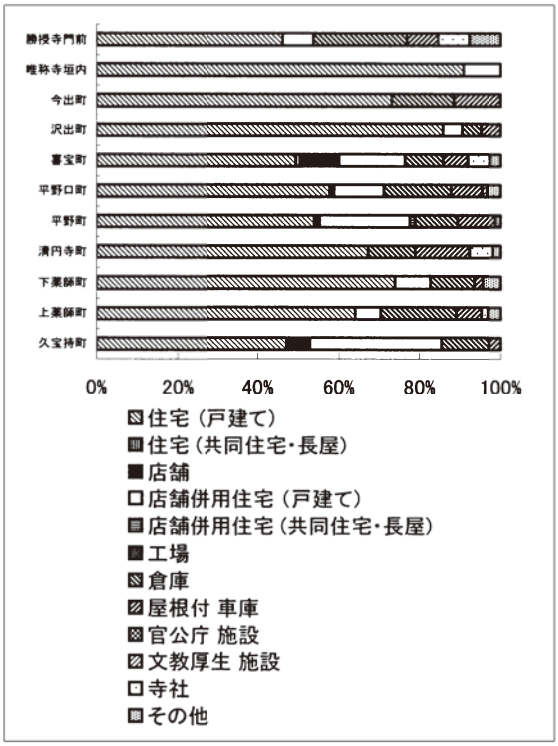

図 14　建物用途（%）

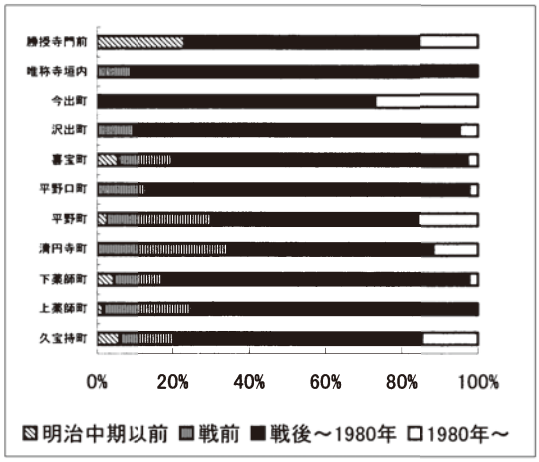

図 15　建築年代（%）

3.2.2　町家型住宅に関して

町家型住宅の各町ごとの棟数は表３の通りである。

表３　各町の町家型住宅の総棟数

町名	久宝持	上薬師	下薬師	清円寺	平野	平野口	喜宝	沢出	今出	唯称寺垣内	勝授寺門前	計
棟数	6	11	7	9	13	11	11	2	0	1	1	72

（久宝持町～喜宝町は表町、沢出町～勝授寺門前町は裏町）

屋根形状（図 16）をみると、各町とも平入の割合が高いが、平野口町や下薬師町では妻入、上薬師町や喜宝町では入母屋造もみられるといった各町ごとの差異がある。かぐら建てのうち前下屋形式は上新町に確認できず、かぐら建てⅠは平野町 4 棟、上薬師町、清円寺町、平野口町、喜宝町に各 3 棟存し、かぐら建てⅡは久宝持町の 1 棟のみである。なお裏町の沢出町、唯称寺垣内にかぐら建てⅠが各 1 棟あるのは、表町の影響であろう。屋根材質（図 17. 18）では、本屋は越前瓦が圧倒的であり、小屋根でも和瓦が多用されるが、平野町では和瓦は不使用で鉄板・銅板が多く用いられている。また久宝持町、下薬師町では和瓦以外に板、鉄板、銅板など多様な葺材がみられる。

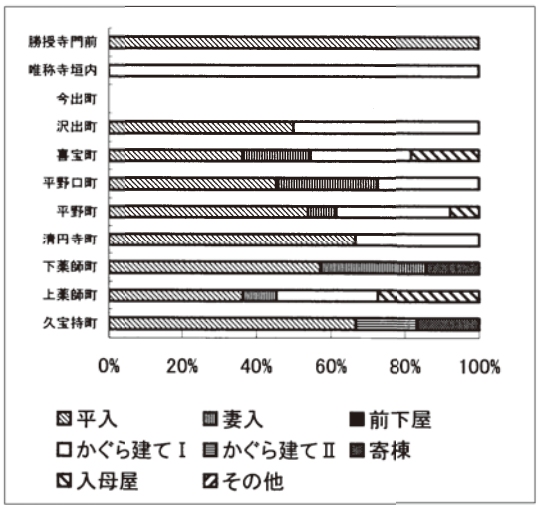

図 16　屋根形状（%）

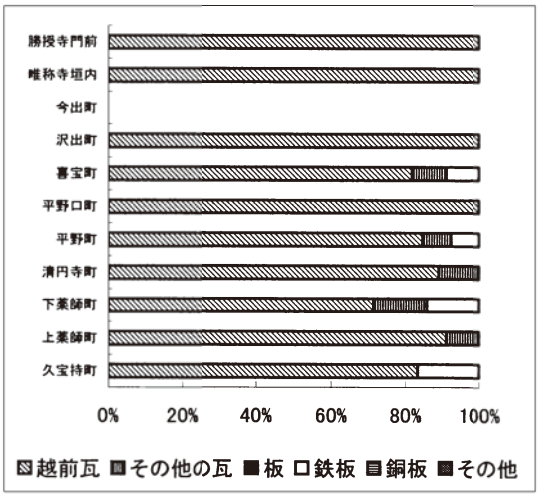

図 17　屋根材質（本屋）（%）

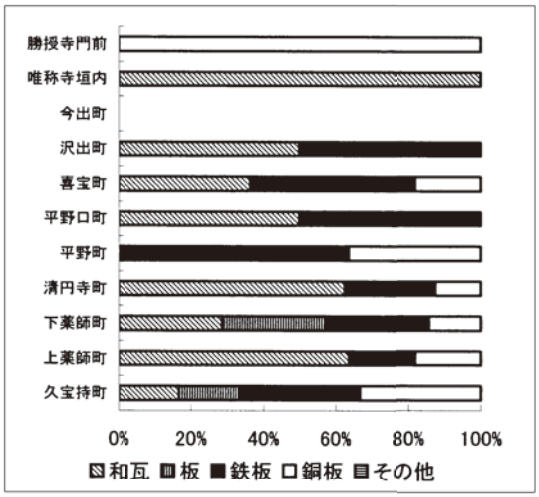

図 18　屋根材質(小屋根)（%）

3. 3　上新町内における表町と裏町の特徴

ここでは表町と裏町を比較する。

3. 3. 1　建物全体に関して

上新町における建物棟数は表町 543、裏町 72 棟である。当然のことながら上新町の町家型住宅は、上ハ町通り沿いの表町に多くを占める（図 19）。また建築年代（図 20）は両町とも新旧混在するが、裏町には戦後の建築がより多い。建物用途で表町に店舗（店舗併用を含む）が集中し、裏町では戸建て住宅の割合が高いというのは、地域性を反映する。

3. 3. 2　町家型住宅に関して

町家型住宅は表町 68 棟、裏町 4 棟で、裏町の事例数が極端に少ないことから両者の比較は困難だが、裏町には改造大きいこと、表町もまた過半で改造されてはいるが、しかし比較的良好な事例も

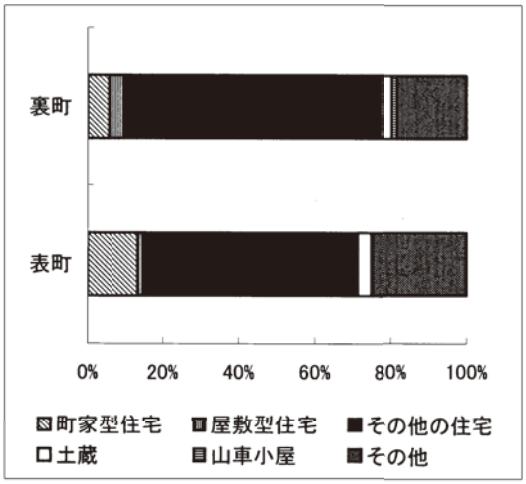

図 19　建物形態（%）

存する(14 棟)、といった点が指摘できる（図 21)。

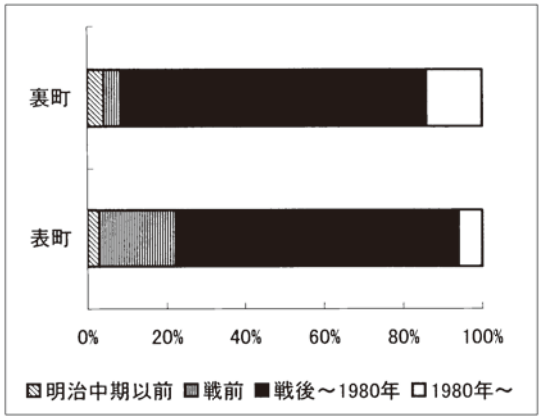

図 20　建築年代（%）

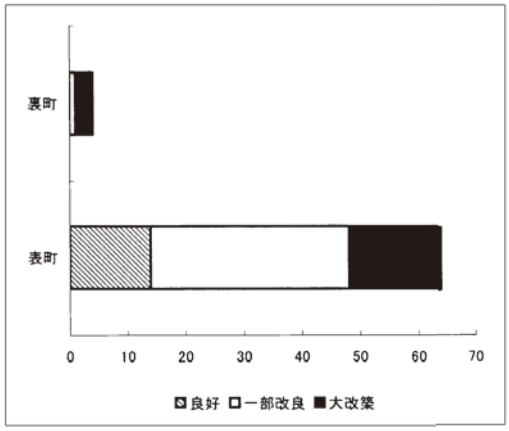

図 21　保存状況（棟数）

3.4　1980 年調査との比較

特徴的な事柄のみ記す。かぐら建て建物の初期的形態として注目される前下屋約 7 棟が消失。かぐら建てについては、約 40 棟からほぼ半減している。戦前の建物が減少し、とくに明治中期以前に遡る建物約 45 棟が 5 棟に激減するという状況である。しかし戦前の建物は全体としてなお残存していて、新旧両建物が混在するというのが実態である。良質の町家として 1980 年調査で個別に取り上げられた、久宝持町の多田家住宅、同町の畑住宅が、ともにＲＣ造建物として新築されている。町並み景観の、ここ 20 年間における変貌の一端を象徴する「事件」である。

4　おわりに

以上、調査結果の検討から、上新町の景観の全体的傾向を概観する。

1，町家は確実に減少傾向にあり、とくに建築年代が古い良質の町家の消失著しい。

2，伝統的な町家は点在していて景観として面的まとまりをもたず、町並みの変容は否定できない。

3，しかし伝統的な町家が壊滅的でほとんど確認できないというのではなく、平入が優越する前近代からの景観の地域性も健在である。

4，表町では店舗の割合が高いという小売商業地としての伝統、地域性は、町並みの変容にもかかわらず、継承されている。

現存する町家には生活の利便性から何らかの改造の手が加えられている。とくに正面意匠は、景観形成上、重要な要素である。その詳細については冒頭でも述べたように、稿を改めて論じたい。

付記：現地調査ならびに調査結果の整理作業では地元住民の方々をはじめ、三国町役場企画情報課課長千利濱喜良氏、（株）サンワコン市街地計画部宮川直子氏に大変お世話になった。末尾ながらここに謝意を表したい。なお本稿は、著者等を中心とする現地調査をもとにした中村環「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究――上新町を中心に――」（平成 14 年度卒業論文　福井大学工学部建築建設工学科　2003 年 2 月）の内容の一部を発展させたものである。

註

1）　福井大学藤田研究室（日本建築史研究室）が行った現地調査。この調査は、藤田と（株）サンワコンとの共同研究「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する調査・研究」（平成 14 年度）の一環であり、また三国町による「街並み環境整備事業」のための現況調査の一部をなす。なお調

査内容について若干記すと、調査期間は予備調査 9 月 7 日、本調査 9 月 9 日～30 日、見直し調査 10 月 2 日～10 月 7 日、そして文献資料調査および写真撮影 10 月 22 日～12 月 4 日であり、文献資料を中心とする調査は現在もなお進行中である。現存する調査対象建物は全 2.935 棟。そのすべてについて外観から判断できる次の 25 項目を調査した。すなわち建物形態、建物構造、建物階数、屋根形状、屋根材質（本屋）、屋根材質（小屋根）、棟瓦、屋根色（本屋）、屋根色（小屋根）、正面外壁の種類、建物用途、職業（店舗の種類）、空き地・空家の有無（空き店舗・ゴミ集積場等）、門の有無と形式、塀の有無と形式、敷地の後退距離、看板の状況、道路設置物、間口、軒高、建築年代、正面外観の改修（保存状況）、正面改修の内容、正面改修の時期、景観上（デザイン）の特徴。さらに本稿では取り上げないが、伝統的な町家型住宅については、各項目に加え正面意匠についても詳細調査し，間口・軒高の測定や写真撮影もあわせて行った。「町家」の概念は必ずしも厳密に定義されていないが、本調査では「町家型住宅」を「隣接する家と軒を接しており，建物前面の道路から後退していない建物」とした。

2）　ここにいう旧市街地とは、『三国町景観づくり基本計画』（2002 改訂、三国町）において重点整備地区として挙げられた都合 4 地区のうちの一つ「市街地中心地区」を基礎に、2002 年 10 月制定された「三国町景観形成基準」が規定する範囲である。具体的には図 1 に示す通り、現町名で山王一丁目～六丁目、南本町一丁目～四丁目、錦四丁目、北本町一丁目～四丁目、神明一丁目～三丁目、滝谷二丁目～三丁目にあたる。

3）　滝谷、下町については、岩瀬純平・藤田勝也・高井翼（2003）「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究－滝谷を中心に－」『福井大学工学部研究報告』第 51 巻第 2 号、高井翼・藤田勝也・岩瀬純平（2003）「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究－下町を中心に－」『福井大学工学部研究報告』第 51 巻第 2 号にその概要を報告した。

4）玉井哲雄氏等による三国町の民家と町並みに関する調査。調査は 1979 年 6 月～1981 年 10 月の長期にわたるが、町並みの本調査が行われたのはおもに 1980 年であることから、本稿では便宜上、「1980 年調査」と表記した。なおこの調査結果は、三国町教育委員会編(1983)『三国町の民家と町並み――三国町民家調査・町並み調査報告書』三国町としてまとめられ、また調査結果を発展させた玉井哲雄（1984）「近世地方都市における町並みの形成――越前三国湊の町家と都市構造――」『建築史学』第 3 号がある。

5）三国町史編纂委員会編(1964)『三国町史』三国町、三国町百年史編纂委員会編(1989)『三国町百年史』三国町などを参照。

6）三国町史編纂委員会編(1973)『三国町史　町内記録』三国町、所収。

7）かぐら建ての類型については、註 4 前掲（1983,1984）による。